

キーツにおける共感の力

——「痛み」の理解を中心として¹——

穴吹 章子

要 旨

キーツ (John Keats, 1795-1821) が、ガイ病院附属医学校の学生であった時に書きとめた「解剖学・生理学覚書」(*Anatomical and Physiological Notes*)における記述と、『エンディミオン』(*Endymion*)のグローカス (Glaucus)、「ハイペリオン」(‘Hyperion’)のハイペリオン、および「ハイペリオンの没落」(‘The Fall of Hyperion’)における詩人などが受ける痛みに関するそれぞれの描写とを比較すると、後者は前者の知識を踏まえて描写されている点を論じた。また、その記述の方法は、身体的・生理学的に理解可能な描写となっていることから、彼らの痛みは一般的に理解可能なものとして示されているのではないかと論じた。また、キーツの痛みに対する態度は共感的なものと考えられるが、それは sympathy よりも、むしろ19世紀後半にOEDに取り上げられる empathyの力によるものと推測した。そして、その共感の力は看護師が臨床の場で求められる能力にも通じるものであると論じた。

キーワード：キーツ、痛み、医学、共感

はじめに

キーツ自身の短い生涯が心身ともに痛みで満ちていたことを、キーツ伝の著者の一人クート (Stephen Coote) は「キーツの人生の絶え間ない悲劇」²と簡潔に評している。幼い時の父親の死、母親の再婚と病死、弟の看病とその死の看取り、自分自身の致命的な肺結核の発症と早すぎる死など、次々と生じる深刻な状況にあって文字通り精神的にも身体的にも、苦痛に満ちていた。それゆえに、ホルスタイン (Michael E. Holstein) はキーツが痛みや苦しみ、死病を治療するために詩を書いていた側面を強調する。³詩作が痛みや苦しみと分かちがたく結びついていることを忘れるキーツ研究者はいない。

また、キーツと医学の関わりについての研究の歴史も長く、フォアマン (Buxton Forman) がキーツの『生理学・解剖学覚書』(*Anatomical and Physiological Notes*)を出版したときにはじまる。重要な研究としては、ヘイルホワイト卿、ウェルズ、ゴエルニヒト、ド・アルメイダら⁴によるものをあげることができる。これらは、主としてキーツが受けたであろう医学教育と当時の医学的知識を解明し、そのような知識の反映をその作品において探求するものであった。

本稿では、キーツが痛みをどのように理解して作品に描いているかを分析する。すなわち、自分も含めて世界に満ちている苦しみを可能な限り受容し理解しうる可能性を模索した点に注目する。また、痛みの理解が当時の医学的知識によるだけ

でなく、実習中や助手を務めた時に得た臨床的な知識による可能性と、さらに、痛みを持つ者たちに対して抱いていた深い共感の特質を論じる。

一般的に、痛みに対して、私たち現代人がとる態度はおおむね、一般的な鎮痛剤のコマーシャルに見る限り、痛みを感知したら、直ちにその除去方法を捜し求めて、可能なら一刻も早くその痛みを取り除くか、幾分でも緩和されることである。それは、外因性のものであれ、内因性のものであれ、頭痛・腹痛・歯痛・生理痛・筋肉痛・腰痛・肩こり等の痛みを取り除き、軽減するための薬剤だけでなく、マッサージなどの様々な代替医療の存在を知らしめ、痛みから逃れ、それを可能な限りコントロールすることを暗に促す。⁵

こうした痛みについて、現代では、痛みが何か別の意味——生の意味を浮かび上がらせる契機——を持っていることについては、あまり強調されることはない。痛みそのものは、医学モデルにおいてすら疾患を確定するためには、痛みの精査ではなく別のさまざまな検査が必要なので、病名という「真実」に辿りつくための信頼できる手段であるとも見なされていない。

では、キーツは痛みに対してどのような態度をとっていたのだろうか？

痛みの軽減と除去

キーツの「解剖学・生理学覚書」には、アヘンを飲んで昏睡状態になった人に行われた頭の手術例についての記述はあるが、その時代はまだ麻酔薬の開発も十分ではなく、その安全な利用も可能ではなかった。麻酔の安全な利用⁶が確立されるのは19世紀後半である。痛みから逃れるには、適量もわからないまま酒やアヘンなどを用いて、痛みを感じる感覚を鈍くするしか方法はなかったようである。

しかし、そのような痛みを麻痺させる方法について、「憂鬱に寄せるオード」にみる通り、キーツ

は必ずしも肯定していないように思われる。

No, no, go not to Lethe, neither twist
Wolf's-bane, tight-rooted, for its poisonous wine ;
Nor suffer thy pale forehead to be kissed
By nightshade, ruby grape of Proserpine ;
.....

For shade to shade will come too drowsily,
And drown the wakeful anguish of the soul.

'Ode on Melancholy', 1-4, 9-10.

だめだ忘却の川へ行つては、びっしり根の張ったトリカブトをその毒酒を求めて、もぎ取つてはいけぬ。その青白い額を冥界の女王プロセルピナの赤い実、ベラドンナに触れさせてはいけぬ。
.....

なぜなら陰があまりにも物憂げに陰に近づき、魂が目覚めた苦痛を消してしまうからだ。

トリカブト (wolfsbane) もベラドンナ (nightshade) もアルカロイドを含んでいて毒作用が強い植物として古くから有名であるが、トリカブトの根は鎮痛作用、ベラドンナの実は痙攣を鎮める鎮痙作用という薬理作用も持っていることが知られていた。⁷このオードではこれらの作用が、死をもたらすにせよ、痛みを鎮め忘れさせる効果を発揮するにせよ、魂が感じている痛み (anguish) を消す (drown) ためにこれらを用いることが退けられている。

それだけではなく、そもそも人間は痛みから逃れられないのではないかと考える傾向を詩人キーツが当初から持っていたことがうかがえる。

Ah, would't were so with many
A gentle girl and boy !
But were there ever any
Writhed not of passed joy ?
The feel of not to feel it,
When there is none to heal it,
Nor numbed sense to steel it,

Was never said in rhyme.

'In drear-nighted December', 17-24.

ああ、多くの優しい少女や少年についても

そうであればなあ。

だが、過ぎ去った喜びのために

身もだえしない者はいただろうか。

感じないという感じ方は、

癒すものが何もなく、

それを鋼のようにしてくれる麻痺した感覚もない時に、

詩歌では歌われなかった。

この詩において、自然界にあっては、冬の木々は冷たさや寒さを感じず青々とした夏を忘れ、凍った川も夏のせせらぎを忘れ去ってしまうが、人間は無垢で生来の優しさをとどめた少年少女（“A gentle girl and boy”）ですら、そのような自然界のものが持つ無関心をもちえず、過去の楽しさを忘れることができず、心の痛みを覚えて身体的に身をよじらせるのである。この場合の痛みは身体的に加えられる痛みではなく、過ぎ去ってしまった喜びがもたらす心の痛みのことであるが、それを思い「もだえ苦しむ」（“Writhed”）という。大人であれば、酒などでその痛みを紛らせることも可能かもしれないが、子供（“A gentle girl and boy”）の場合、その手段を取ることもできないので、その痛みを癒すものは何もないことを暗示する。すなわち、ここには苦痛は受容されねばならないものであるというキーツの意識を読み取ることができよう。さらに今はそれを癒してくれるものも、硬くしてしまう感覚の麻痺もない時であると言い、そして感じないという感じ（“the feel of not to feel it”）⁸は詩で歌われなかったことを指摘することからも、詩人として痛みを受容しようとする姿勢がうかがえよう。そして、身体的な反応によって、この苦しむ様子が引き起こされるから本人以外にもその痛みを押し量ることができることも指摘しておきたい。

痛みのデカルト的モデルと

キーツの医学的知識

ところで、「痛み」が生じてくるプロセスとして考えられているものは、デカルトの「痛みのロープ牽引モデル」⁹に遡るとされている。それは、外傷部位である皮膚に痛みの刺激が加わると、ちょうど脳から達している「綱の一端をひっぱることにおいて同時に」、綱の終点である脳内に下がっている「他端の鐘を鳴らす」¹⁰ように痛みを生じさせるという、痛みの機械論モデルのことである。

また、痛みを知覚した後の反応についても、痛みを感知してやけどをするという身体上の危機を回避するプロセスを示している。¹¹

キーツは、覚書においてMr.Cとして言及されているクーパー（Astley Cooper, 1768-1841）からガイ病院医学校（Guy's Hospital School of Medicine）で生理学を学んだとされている。キーツも痛みについて外傷部位への刺激が神経を通過して脳に伝えられるというデカルト的なモデルの教えを学んでいたことが、「解剖学・生理学覚書」からうかがえる。

Physiology of the Nervous System. The 1st office is that of Sensation --- it is an Impression made on the Extremities of the Nerves conveyed to the Brain. This is proved by the effects of dividing a Nerve. After a time the sensation of a Nerve will return as it unites --- in a small nerves 2 or 3 Months will be required for its reunion --- 12 months for a large one.¹²

神経系の生理学。その第一の機能は外的刺激に対する感覚の機能である。その感覚は、神経の末端に加えられ、脳に伝えられる感じ（impression）のことである。このことは、神経を裂いた影響によって証明される。しばらくして神経が結合すると、神経の感覚が戻る。小さい神経では再結合には2～3ヶ月要するだろう、大きい神経では12ヶ月である。

そして、「感覚は脳に伝えられ、またそこから末端に伝えられることもある」(“The sensation will sometimes be conveyed to the Brain and thence to the Extremities.”)¹³と、神経によって脳が刺激を受けたり送り出したりするとも記している。¹⁴

次の詩の一節は、このような生理学的知識を踏まえたものと考えられる。

He spake, and ceased, the while a heavier threat
Held struggle with his throat but came not forth ;
.....

And from the mirrored level where he stood
A mist arose, as from a scummy marsh,
At this, through all his bulk an agony
Crept gradual, from the feet unto the crown,
Like a lithe serpent vast and muscular
Making slow way, with head and neck convulsed
From over-strained might.

彼は語った、そして終えた。その間、耐えがたい恐れが、喉とあらがうが、外に出なかった。

.....

彼が立っている鏡のような面から
霧が立ち上った、まるで泡立った沼からかのように。
このとき、体中を激痛が
徐々に忍び込み、足から頭へと、
しなやかで大きく強い蛇が
ゆっくり進み、全力を
ふりしぼりすぎて、その頭と首が
激しく痙攣するように。

‘Hyperion’ I, 251-252, 258-263.

『失樂園』(*Paradise Lost*) 第9巻のサタン(Satan)が蛇の中に入る場面に影響を受けたという箇所であるが、ハイペリオンが言葉を言い終え、ある激しい恐れ(“a heavier threat”)にとらわれた場面である。その恐れは、喉のところに詰まった何かのようであり、窒息しそうな恐れと

重なり合う描写となっている。冷たさによるものと思われる苦痛がハイペリオンの体の中を足元から頭部へと徐々にじわじわと上がっていく様子が、しなやかな蛇が大きく力強く身をくねらせながらゆっくりと進み、頭部を痙攣させる様子にたとえられている。この比喻からは痛みを感じるのと同時に、蛇のように体をよじり、喉のところで何か詰まったか、頭部を激しく痙攣させて、その激しい苦痛に耐えている様子も彷彿される。逆にいえば、ハイペリオンの恐れについては、その身体のようにくねる動きや、頭部を痙攣させる感じや、窒息しそうな苦しさと重ねられているので、推測がつくと言えよう。

また、次の詩の一節も生理学的知識を踏まえていることがより鮮明に見て取れる。

I heard, I looked : two senses both at once,
So fine, so subtle, felt the tyranny
Of that fierce threat and the hard task proposed.
Prodigious seemed the toil ; the leaves were yet
Burning—when suddenly a palsied chill
Struck from the paved level up my limbs,
And was ascending quick to put cold grasp
Upon those streams that pulse beside the throat.
I shrieked ; and the sharp anguish of my shriek
Stung my own ears. I strove hard to escape
The numbness, strove to gain the lowest step.
Slow, heavy, deadly was my pace ; the cold
Grew stifling, suffocating, at the heart ;
And when I clasped my hands I felt them not.

‘The Fall of Hyperion’, I, 118-131.

私は聞き、見た。その二つの感覚は同時に製瓶で繊細であるが、その激しい脅威の圧倒する支配力と提案された困難な仕事を感じた。その労苦はけた外れに思えた。木の葉はまだ燃えていた。—そのとき突然、麻痺したような悪寒が敷石を敷いた面から昇り私の手足を襲った。すぐさま上昇し、喉の横で脈打つあの血流を冷たくつかんだ。

私は叫んだ。私の悲鳴が私の耳をつんざいた。
 私はその無感覚を逃れようと奮闘した。
 最下段に達しようと骨折った。私の歩みは
 ゆっくりと重く命がけだった。
 冷たさが心臓のところでふさがり詰まっていた。
 私が両手を握りしめたとき、手を感じなかった。

この個所を、ゴエルニヒト (Donald C. Goellnicht) は、差し迫った死の臨床的な徴候の描写である点を指摘している。¹⁵ 上記で言及したデカルトの例は、熱さが身体末端である手先・足先で感じられた時の反応である。ここでは、比喩ではなく、実際に「恐ろしい脅威」(That fierce threat) がもたらすと心因性の「恐怖」にとらわれたときに、皮膚の表面で感じられる、命を奪う危険を伴う程の冷たさが脳にまで達する様子の描写とも考えられよう。足先から血の気が引き、力が萎え、腰が抜けてしまうときのような反応を彷彿する。麻痺させるような冷たさ、冷氣 (“a palsied chill”) がどのように瞬時に体感されるものであるかが示されている。冷たい感覚が足から上部へ、さらに喉の横あたりの動脈まで達し、体温低下を引き起こす。この頸動脈は頭部に血液を送る血管なので、脳貧血や脳酸欠の状態を思わせる麻痺感や感覚の喪失を伴う冷たさが脳まで達したことも推測できる。

ところが、この冷たさはかじかむ感じ、しびれた感じ (“numbness”) として感じられていて、その反応として自分の耳すらつんざくような叫び声をあげるとなっている。また同時に、私たちは脈をとる場所として喉もとの頸動脈を触わる¹⁶が、この麻痺した冷たさ (a palsied chill) は、拍動が冷たくはつきりと脈打っていない、あるいは脈拍数の低下が触る側にも感じ取れるのである。

そして、血液が全身に送られるべき、あるいは戻ってくる心臓のところで、冷たさ (the cold)、すなわち温かくない血液がとスムーズに流れず滞っているような描き方 (“stifling, suffocating”) もされている。そのあと、両手を握り締めてその感

覚がなくなっていることに気づくという。これも、血液循環と神経伝達の知識を踏まえていると考えられよう。その作用は命を支えるもの (“Those to support Life”) として次にあげるうちの2と3の働きによるものである。

- 1 Function of the Stomach and Intestines & c...
- 2 Circulating, Heart, arteries, and Veins...
- 3 Brain Medulla oblongata and Spinals, & Nerves...¹⁷
 1. 胃と内臓等の機能
 2. 血液循環、心臓、動脈、静脈
 3. 脳の延髄、脊柱、神経

ここで、「覚書」における次の記述にも注目しておきたい。

If there be in Fever a determination of Blood to the Head the Pulse will decrease. Heat readily increases the Pulse — the warm bath will elevate the Pulse to 120. Cold on the contrary will diminish soon reduce it, diminishing the diameter at the same time.¹⁸

頭部への血行が発熱状態にある時、脈拍は減少する。熱はただちに脈拍を増加させる。温浴は脈拍を120まで増やす。反対に冷水浴はすぐに減少させ、同時に血管を細くする。

ここには発熱¹⁹しているとき血液が頭部へ流れる傾向があると、脈拍 (心拍数) は減少するという考えが見られる。すなわち一般的に温かさは脈拍を増し、冷たさは減じるという知識がキーツには備わっていたということが分かる。脈拍の減少が、それを触診すべき個所で、麻痺や無感覚として感知されるのはこのような知識を踏まえたものといえよう。

また、血液の凝固に関しても、ド・アルメイダ (De Almeida) はハンター (John Hunter, 1728-93) の説だけを取り上げているけれど、²⁰キーツ

は覚書にいくつかの説を記し、²¹血液が凝固することについては、さまざまな説があるにせよ、空気にさらされてもいないし、温かくななくても、死ぬ時でなくても、凝固することがあると記述している。「ハイペリオンの没落」における「私」の瀕死の状態について、血液が凝固する可能性として描いていると言えよう。

以上のことから、キーツは、痛みに関して生理学や解剖学の知識を踏まえて詩作していたと結論できよう。このような観点からの描写は、精神的なことは身体的なこととして感知されるという意味で両者が分かちがたく結びついているということを示している。それだけでなく、主観的にしか感じられないはずの「恐怖」もそれによる痛みを身体的に描写することによって、その痛みを他者から見て取れるものとし、さらにそれを具体的に理解可能なものにするのに役立っていると言えよう。

このような身体内部で生じている生理学的なプロセスを彷彿させるものとして、相手が苦境にある状況を視覚的に描く傾向は、以下に見る通り当初からあったものと考えられる。

エンディミオンが祭りの場に現れたときの様子がある。キーツはそのやつれた様子を幾人かの人に気づかせている。

But there were some who feelingly could scan
A lurking trouble in his nether lip,
And see that oftentimes the reins would slip
Through his forgotten hands. Then they would
sigh

....

Why should our young Endymion pine away?

Endymion, I, 178-181, 184.

しかし、彼の下唇に潜む不調に目をやり、
しばしば手綱が彼の忘れられた両手から
滑るのを見てとった人がいた。

そのとき彼らは、我らの

若きエンディミオンはどうして
やつれてしまっているのかと
ため息をついたものだった。

十分に緊張を保てないため、下唇がおそらくしまりがなく、手綱をたびたび落とすほどその両手も力は入っていない。下唇とか手とかに力が入らないことは、病気か疲労のせいで熱や痛みがあっても倦怠感がある時に私たちも日常的に経験する。全身に力が入っていないことが見て取れることから、エンディミオンが痛みか何かにさいなまれていることが周囲に気づかれるのである。

そのあと、彼は夢で月の女神に出会って変化してしたことを妹ピオナ²²に語るのものであるが、その苦痛の質が、妹の経験知を超えることも、その顔に見えるものをうまく読み取れない (“perplexing”) ということを示している。

No, I can trace

Something more high perplexing.

Endymion, I, 514-515.

いえ、私には

もっと強く当惑させるものが迎れます。

グローカス（グラウコス）がシラ（スキュラ）
を見つけた時、彼はその顔に死相を読み取る場面
についても同じことがいえる。

Young lover, I must weep — such hellish spite
With dry cheek who can tell? While thus my
might

Proving upon this element, dismayed,

Upon a dead thing's face my hand I laid.

I looked — 'twas Scylla! Cursed, cursed Circe!

.....

Cold, oh cold indeed

Were her fair limbs,

Endymion, III, 615-619, 623-625.

恋する若者よ私は泣かねばならない — 干からびた頬の

そんなにもひどい恨みを一体誰が語れるだろうか？

このようにこの元素の水を

試している私の力がうろたえているとき、

死者の顔に手を置いた。

私は見た。シラだった。呪わしきサーシよ、

ああ本当に冷たかった、

彼女の美しい手足は。

まず、この場面がオウィディウスの『転身物語』(第14巻、37-74)の相当する場面とは違う点に注意しておきたい。スキュラ(シラ)はキルケ(サーシ)によって巨岩に住む6頭12足の海の怪物にされるのに対して、キーツは彼女を仮死状態か昏睡状態にして、人間的な感じを与えている。穏やかな顔とは正反対の、苦悶か恨みが残った顔(“such hellish spite”)をし、頬も干からび、生命の持つみずみずしさを失っていることを、グローカスに顔や手足に手を当てさせて、また手足の冷たさを具体的に語らせているのである。

また、シラを海の底に安置しおえたグローカスは、そのあまりに激しい作業と恐怖心とで、いわば一夜にして老人になってしまった場面も生理学的な知識を踏まえていると考えられる。

I left poor Scylla in a niche and fled.
My fevered parching-up, my scathing dread
Met palsy half way. Soon these limbs became
Gaunt, withered, sapless, feeble, cramped, and
lame.

Endymion, III, 635-638.

私はかわいそうなシラを窪みに残し去った。
私の熱を帯びた干からびと、害をなす恐れが
途中で麻痺に直面した。すぐにこの手足が
やせ衰え、干からび、弱り、痙攣し、不自由になった。

このようなグローカスの変身も、キーツ独自の神話創造である点も明記しておかなければいけない。オウィディウスや、ランプリエール(John Lemprière, 1765-1824)の『古典事典』

(*Lemprière's Classical Dictionary*)では、その変身は浜辺に生えている不思議な薬草を口にした後に海神になり、²³その後、シラに恋をすることになっている。

キーツの場合、シラを海底に安置する作業の激しさがグローカスを発熱させ(“fevered”)、身体内部から焼き尽くし(“parching-up”)、それに加えて、仮死状態であれ死んだと思っている愛しい人を運ぶという恐怖心も心身を傷つけ(“scathing”)るので、見える形として身体症状の痙攣(“palsy”)を引き起こす。そして疲労を回復する間もなく休みなく働いたために衰弱し手足が弱り萎えてしまったという描写である。もちろん、震えや呻き声と同じく、痙攣(“palsy”)も神経(“nerve”)の繊細な糸(“delicate fibre”)が起こす神経的(“nervous”)生理学的な現象である。衰弱の程度も、たぶん寝食を忘れて働いたせいでやせ衰え(“gaunt”)、萎縮し(“withered”)、みずみずしさがなくなり(“sapless”)、力がなくなり(“feeble”)、冷たさからであろう痙攣をおこし(“cramped”)、不自由になって(“lame”)しまったという具合に、視覚的臨床的にその衰弱の程度が描写されている。

このように、グローカスの変身も、あまりに激しい労働と強い恐れから、一気に衰弱して老人のようになってしまうというような神話に書き換えられていたのである。神話的な出来事が人間化され、一般的な老化のプロセスによって足腰が衰えた老人となった話になっているのである。また同時に、見て取れる苦悶や痛みを身体的に理解することによって、相手の苦境状態にも共感できる糸口になっていると考えられる。

このような理解や共感の仕方は、苦痛を直感的・経験的に見て理解することである。キーツは痛みに気づくことの重要性を、詩人として自らの進むべき方向を見据えた有名な「処女思想の部屋」²⁴の手紙で述べていた。ワーズワース(William Wordsworth)に言及した後でこう続けている。「哲学の原理は、それが私たちの脈拍

において証明されなければ、原理ではない。私たちが飽きるまでは、理解しないものだ」と。また、「飽きるまでは、理解したことにはならないのだ」と、脈拍が速くなったりするとか、飽きるほど堪能するとか、何かを理解するためには身体的な理解の仕方も重要であることが述べられていた。すなわち哲学の理解においても、そのプロセスでわくわくするような動悸を感じることを重視していたのである。

同じく「処女思想の部屋」について述べた個所で、「世界が悲惨と失意、苦痛、病気、苦難に満ちていると骨の髄（神経）に確信させる効果が」²⁵と語っていた。「処女思想の部屋」に喜びのうちいつまでもとどまりたいと思うことそのものが、逆に、世界が喜びに満ちているのではなく、悲惨さや失意、苦痛、病、苦難に満ちていることを骨の髄、神経（nerves）で確信するというのである。他者の苦痛などを自分の神経で共感するように感じ取ることだと考えられていた。

また、1818年10月弟夫妻宛の手紙²⁶でも、レノルズ（Reynolds）家の娘たちの従妹のジェーン・コックス（Jane Cox）について、「私は彼女の中で生きているので、自分のことはすっかり忘れる」と、同じようなことを述べていた。

これらの手紙は、キーツの想像力の特徴を表すものとして重要なものの一つであるが、キーツの痛みについての理解を示すものとしても重要であると考えられる。すなわち、キーツは、この世が悲惨や悲嘆、痛み、病、辛苦に満ちていると、自らの神経（nerves）で実感し、確信していると言うからである。また、キーツにとって、痛みを知ることは、世界を知ることであり、それは、自らの痛みだけでなく、他者の痛みをも、理念ではなく「神経」で感じ取り、身体的に理解し、対象に入り込む、あるいは対象を自分の中に取り込んでその痛みを生きるということであろう。

キーツの共感的姿勢と看護

上記で指摘したとおり、詩における痛みの描き方や、手紙における対象についての理解の仕方は、あたかも他者が自らの身体で追体験できるかのような、身体的・生理学的な理解の表れであり、この理解は共感的なものにつながると考えられる。しかしこの「共感」は、英語ではsympathy（同情、共鳴）よりもempathy（感情移入）に近いものと考えられる。

ところが、empathyという言葉は、*OED*によれば初出は20世紀初頭で、ドイツ語Einfühlungの訳語として成立しているため、言葉の上だけではあるが、少なくとも当時はこの感じ方が意識的にとらえられていなかったと考えられ、キーツの共感の特質の一つをなすものだったと考えられる。

ちなみにsympathyについては、「覚書」において、神経の働きの一つとして記述²⁷があるが、それは生理学的な意味で用いられている。

最後に、このような共感の重要性は、キーツが受けた教育においてもそうであった可能性を指摘しておきたい。現代の医療者は、病者が訴える痛みや疾患を把握するために、さまざまな検査結果を利用し、痛みの緩和や疾患の治療方針を立てる。しかしそのような頼りとすべき判断材料がなかったキーツの時代では、うめき声や表情などを手がかりにして病者の苦痛の程度を推測していたと考えられる。

キーツは、外科医に求められる能力を養うために、手術助手²⁸として患者のケアの責任の一端を負うだけでなく、治療行為にも携わっていた。ガイ病院と聖トマス病院の内科・外科医が受け入れた入院患者²⁹について、その病気やけがの症状を認め、苦痛の変化や推移を身体的・生理学的に読み取り、それを自分の身体感覚のスケールに基づいて評価して、治療にあたっていたと考えられる。

ド・アルメイダは、キーツにとって顔やその表情が、痛みを知る手がかりになるだけでなく、重要なものとして捉えられている点を指摘してい

る。³⁰キーツは上記で指摘したように、痛みを、顔や動作などの生理学的・身体的側面からも描いていた。それはまさしく、他者の痛みを自分の中で体験するということであると考えられる。このような態度や姿勢は、現代の看護師に必要とされている能力の一つにつながっている。現在でも患者の痛みを正確に評価することはまだ不可能ではあると言われているが、痛みの程度を評価する方法の一つとして行動や自律神経系のサインに基づくオブザーバンスコアというものがある。それは動作や表情からその強さや性状を推察するというものである。³¹うまく言語化できない重症者、高齢者や子供などには有効であるとされている。観察できる症状から痛みを推察する現代の看護師がとる方法は、キーツによる痛みの描写に重なると言えよう。

また、深井喜代子は「痛みを訴えている人の痛みの知覚や苦痛は、その人の個人的体験として内部に隠蔽されているので、他者は同じ痛みを共有することはできない。つまり、他者は、その痛みを体験がもたらす、反応としての痛み行動からしか疼痛患者の痛みを推測できない」³²と述べている。他方、看護師に「痛み」を理解しようとする動きもあり、深井³³は、患者の痛みを緩和するためのケアを実践するために、表在痛（皮膚痛覚）、

深部痛（筋や関節の痛み）、内臓痛に大別し、これらの痛みを看護師の痛み体験から他者の痛みを類推できることを、看護師に求めている。言い換えれば、他者の痛みを共有するには、他者の様子を敏感に感じ取り痛みの質と程度を推測するか、あるいは何らかの手段を用いて他者の痛みの内部にはいり、そこから痛みを感じるというものである。正しくこれはキーツがしていたことだったと言えよう。

アーサー・W・フランクは「病」や「痛み」が物語を創出する点を指摘し、そのような「痛みの語り」というべきものがあるとしているが、キーツが「ハイペリオンの没落」の詩人と、『エンディミオン』のグローカス（グラウコス）の痛みの描写を通じて語っているものは、フランクが分類した「回復の語り」「混沌の語り」「探求の語り」のうち「探求の語り」³⁴が近いと思われる。

以上検討したキーツの痛みの理解の仕方が、キーツ独自の「共感」の力によるものか、職業的に必要とされた資質なのかについての考察は、今後の課題としたい。

なお、本研究は平成19年度兵庫県立大学特別教育研究助成金の助成を受けて実施されている。

註

- 1 本稿は、イギリス・ロマン派学会第33回全国大会（2007年10月14日）において「キーツにおける痛みの意味」のタイトルで発表したものに加筆訂正したものである。
- 2 The unremitting tragedies of Keats's life - the loss of his father, the death of his mother, the appalling time spent nursing his younger brother during his fatal illness, the incipient advance of Keats's own tuberculosis - all these not only help explain the poetry's preoccupation with suffering

but suggest how, in his refusal to be humiliated into a mere sentimental pessimism, Keats exercised a spiritual resilience that was impressive both in its emotional power and in its qualities of intellectual self - criticism.

Stephen Coote, *John Keats: A Life* (Hodder & Stoughton, 1995), p. xi. 下線は論者による。

- 3 "...since throughout his poetry Keats had written to remedy pain, suffering, and death. He most clearly formulates his healing mission in the *The Fall of Hyperion: A Dream* when the narratoor

- argues that the poet is a “sage ; / A humanist, physician to all men” (I.189-190).” Michael E. Holstein, ‘Keats : The Poet-Healer and the Problem of Pain’, *Keats-Shelley Journal* 36 (1973), 32-49.
- 4 Sir William Hale-White, *Keats as Doctor and Patient* (Oxford Univ. Press, 1938), Walter A. Wells, M. D., *A Doctor’s Life of John Keats* (Vantage Press, 1959), Donald C. Goellnicht, *The Poet-Physician : Keats and Medical Science* (University of Pittsburgh Press, 1984), Hermioni de Almeida, *Romantic Medicine and John Keats* (New York : Oxford Univ. Press, 1991)
- 5 こうした現代社会の状況について、イリッチは「文化的医原病」の一つである「痛みの抹殺」として論じている。イヴァン・イリッチ（金子嗣郎訳）『脱病院化社会』（晶文社、988年）特に103-121頁。
- 6 「痛みをとるために、ヒヨス、ケシ、マンダラゲ、大麻などの植物を煎じて飲ませたり、アルコールを飲ませる方法が用いられていたが、吸入麻酔が、1845年アメリカの歯科医ウェルズにより笑気麻酔が、また46年に同じくアメリカの歯科医師モートンによりエーテル麻酔が始められ、イギリスでは47年にスノーJohn Snow (1813-85) によりクロロホルム麻酔が始められた。」山村秀夫、電子ブック版『日本大百科全書』「麻酔」の項。
- 7 薬物学の教師William Salisburyによれば、
“The operation of opium... [is] followed by a degree of nausea, a difficulty of respiration, lowness of the spirits, and a weak languid pulse.”
“CONIUM maculatum, HEMLOCK” as sedative medicine rather than a poison,...” Goellnicht, p. 226に引用。
- 8 山内正一は、“The feel of not to feel it”を、詩人キーツの出発点で、単なる無感覚ではなく「喜びの喪失後のメランコリー」に通じるものであるとしている。「“The feel of not feel it”をめぐって」『英語青年』（1995年12月号）
- 9 痛みについて論じた書物の大半にはこのデカルトのモデルが掲載されている。たとえば、デイヴィッド・B・モリス（渡邊勉、鈴木牧彦訳）『痛みの文化史』紀伊国屋書店、1998年。
- 10 「火Aが足Bの近くにあるとすると、読者をご存じのように、非情に急速に動くこの火の粒子は、それらが触れる足の皮膚の部分と一緒には動かす力を持つ。こうして、足のその部分に結びついている細糸c、cを引っ張り、同時に細糸の終点にある孔の入口d、eを開く。ちょうど、綱の一端を引っ張ることによって、同時に他端に下がっている鐘を鳴らすようなものである。」ルネ・デカルト（伊東俊太郎・塩川徹也共訳）「人間論」『デカルト著作集4』（白水社、1973年）、240-241頁。
- 11 「火から遠ざかり身を守る動物精気が、導管を通して運ばれ、一部は足を火から遠ざけるのに用いられる筋肉の中に、一部は眼と頭を火の見えるほうに向けるのに使われる筋肉の中に、他の一部は全身を守るために手を前に出し、全身を折り曲げるのに役立つ筋肉の中にはいる。」同書、241頁。
- 12 *John Keats’s Anatomical and Physiological Note Book*, ed. by Buxton Forman (Haskell House Publishers Ltd., 1970), p. 55.
- 13 *John Keats’s Anatomical and Physiological Note Book*, p. 56.
- 14 Cooperの言葉では次の通りである。“the nerves [which] are freely distributed to every part of the human frame, and are the means by which all voluntary and involuntary motions are maintained.” Goellnicht, p. 145に引用。
- 15 “Here Keats describes the clinical signs of approaching death : the drop in body temperature ; the slowing of the pulse rate, vividly portrayed here in the carotid arteries that take blood from the head to the neck, “those streams that pulse beside the throat” ; and the loss of sensation. The medical accuracy of the images adds to the horror of the scene.” Donald C. Goellnicht, *The Poet-*

- Physician : Keats and Medical Science*
(University of Pittsburgh Press, 1984),
p.230.
- 16 ちなみに聴診器が発明されたのは1816年でフランス人ラエネク (René Théophile Hyacinthe Laennec, 1781-1826) による。
- 17 *John Keats's Anatomical and Physiological Note Book*, ed. by Buxton Forman (Haskell House Publishers Ltd., 1970), p.1.
- 18 *John Keats's Anatomical and Physiological Note Book*, ed. by Buxton Forman (Haskell House Publishers Ltd., 1970), p.9.
- 19 体温が病気の診断に活用されるようになるのはイギリスでは19世紀の後半である。
- 20 Hermione de Almeida, *Romantic Medicine and John Keats* (Oxford University Press, 1991), p.91.
- 21 “*Coagulation of the Blood*. The first idea is that it is kept fluid by heat. This however is fallacious, ... The 2 opinion was that rest was the Cause - it will however coagulate though kept in Motion and Blood in the living [sic] will remain a considerable time at rest without coagulating. Huson thought that the Air was much concerned in the Process. ... Blood without the access of Air coagulated in 3 3/4 hours and with it I 1/4 hour according to Mr Huson's experiment. Mr Hunter who thought the Blood possessed Vitality thought it underwent a change like the contraction of Muscular Fibres at the time of death. Mr C's opinion is the Blood is preventing from coagulating by nervous energy.” *John Keats's Anatomical and Physiological Note Book*, ed. by Buxton Forman (Haskell House Publishers Ltd., 1970), p.5. なお、HusonはWilliam Hewson (1739-74)、Mr CはMr. (afterwards Sir) Astley Cooper (1768-1841) のこと。
- 22 ちなみに、エンディミオンを看護する妹の名前のPeonaピオナはpeony (シクヤク 芍薬 (根) — 鎮痛剤) からきているもので、「神々の医者」Paiō (後にアポローンと同一視されたパイエオン)に通じるものである。
- 23 「それにしても、どんな薬草がこんな靈験をもっているのだろう」
私はこう口ずさむと、手で草を摘み取って、それを歯で噛んでみた。
と、道のこの汁液が喉を通るか通らないかのうちに、突如、からだの奥底がふるえるのを感じた。土とは別世界への憧れに、この胸がとらえられるのをおぼえたのだ。そして、もうこれ以上、その衝動に抗することはできなくなった。・・・
わたしがわれに返った時は、この全身がむかしとは違っていたし、心ももとのままではなかったのだ。緑青色のこのひげ、水中にたなびいているこの髪、大きな肩、魚の尻尾のようにくねった脚の先などを目にしたのは、われながらそのときがはじめてだった。」(第13巻)オウイディウス (中村善也訳)『変身物語 下』(岩波書店、1984年) 244-245頁。
What herb, said I, hath such a power? In hast
An herb I puld, and gave it to may tast.
No sooner swallowed, but my entrails shooke:
When forth-with I another nature tooke.
.....
Then first of all this sea-greene heard I saw,
These dangling locks, which through the deepe I draw;
Broad shoulder-blades, blew armes of greater might;
And thighs which in a fishes taile unite.
Ovid's Metamorphosis by George Sandys,
ed. by Karl K. Hulley & Stanley T. Vandersall
(University of Nebraska Press, 1970),
pp. 599-600.
As he was fishing, he observed that all the fishes which he laid on the ground, and immediately escaped from him by leaping into the sea. He attributed the cause of it to the grass, and by tasting it, he found himself suddenly moved with a desire of living in the sea. Upon this he leaped

into the water, and was made a sea deity by Oceanus and Tethys, at the request of the gods.

Lemprière's Classical Dictionary Third Edition, by F. A. Wright, M. A. (Routledge & Kegan Paul, 1984), p. 254.

- 24 "... In regard to his genius alone -- we find what he says true as far as we have experienced and we can judge no further but by large experience -- for axioms in philosophy are not axioms until they are proved upon our pulses : We read fine -- things but never feel them to thee full until we have gone the same steps as the Author. -- I know this is not plain ; you will know exactly my meaning when I say, that now I shall relish Hamlet more than I ever have done -- Or, better -- You are sensible no man can set down Venery as a bestial or joyless thing until he is sick of it and therefore all philosophizing on it would be mere wording. Until we are sick, we understand not ; -- in fine, as Byron says, "Knowledge is Sorrow" ; and I go on to say that "Sorrow is Wisdom" -- and further for aught we can know for certainty ! "Wisdom is folly" -- So you see how I have run away from Wordsworth, and Milton ; ..."
- (I, 279) 下線は論者による。

- 25 "... we see nothing but pleasant wonders, and think of delaying there for evcer in delight : However among the effects this breathing is farther of is that tremendous one of sharpening one's vision into the heart and nature of Man -- of convincing ones nerves that the World is full of Misery and Heartbreak, Pain, Sickness and oppression --" (I, 281) 下線は論者による。

- 26 "She is not a Cleopatra ; but is at least a Charmian. She has a rich eastern look ; she has fine eyes and fine manners. When she comes into a room she makes an impression in the same as the Beauty of a Leopardess. She is too fine and too conscious of her Self to repulse any Man who may

address her -- from habit she thinks that nothing particular. I always find myself more at ease with such a woman ; the picture before me always gives me a life and animation which I cannot possibly feel with any thing inferior -- I am at such times too much occupied in admiring to be awkward or on a tremble. I forget myself entirely because I live in her." (I, 395) 下線は論者による。

- 27 *Sympathy*. By this the Vital Principle is chiefly supported. The function of breathing is a sympathetic action -- from irritation produced on the beginning of y Air Tube affects y Abdominal Muscles and produces coughing. (p. 56)
- 28 主として、外科手術の援助、外科医に伴われる病棟回診などを行っていた。
- 29 ガイ病院では、治らない患者には実験的治療が行われていたことが知られている。
- 30 Hermioni de Almeida, *Romantic Medicine and John Keats* (New York : Oxford Univ. Press, 1991), p. 54.
- 31 松本真希「痛みの評価・診断法」『ペインマネジメント』(南江堂、2004年) 27頁。
P. Prithvi Raj『ペインマネージメント最前線』(中山書店、1996年) 33頁。
- 32 深井喜代子「痛みを解剖する ― 痛みの多次元モデル」、深井喜代子(編)『看護者発；痛みへの挑戦』(へるす出版、2004年)、9頁。
- 33 深井喜代子「痛みのケアのキー・パーソン」、深井喜代子(編)『看護者発；痛みへの挑戦』(へるす出版、2004年)、4頁。
- 34 アーサー・W・フランク(鈴木智之訳)『傷ついた物語の語り手』(ゆみる出版、2002年)

Pain and Keats' Empathy

ANABUKI Akiko

Abstract

Keats's *Anatomical and Physiological Notes* shows his scientific and medical knowledge which seems to enrich his poetry. Comparing the descriptions of some poetic characters with pain, Endymion, Hyperion and others, to the *Notes*, we can make clear that he uses such knowledge to create those characters and to urge us to feel their physical pains deeply. That is, he describes their pains with physiologically and anatomically understandable words and images. We argue that such an understanding of pain is related to the attitudes of nurses, which influenced Keats himself during his working days at the Guy's hospital. We conclude that his attitude may be described as "empathy", which is considered his important ability to understand the pain of others.

Key Words : Keats, pain, medicine, empathy